

平成31年度

いじめ防止基本方針



I 基本理念(方針)

< いじめに対する基本認識 >

すべての子どもと大人が「いじめはいつでも、どこでも、誰にでも起こり得る」という認識をもつ。

- (1) いじめは人権侵害であり、「いじめをしない、させない、許さない」学校をつくる。
- (2) 何でも言い合え、何でも聞き合え、互いを認め合える温かい学年・学級をつくる。
- (3) 保護者との信頼関係づくり、地域や関係機関との連携協力に努める。

II 組織

<いじめ対策委員(実働委員)>

校長 教頭 教務主任 生徒指導主任 養護教諭 該当学年教諭 (相談員) (SC)

<拡大いじめ対策委員(生徒指導委員会と兼ねる)>

上記委員 + 生徒指導委員会のメンバー

III いじめの防止

学校は、人権尊重の精神に基づく教育活動を展開するとともに、子どもたちの主体的ないじめ防止活動を推進する。

< 心の教育 >

(1) 望ましい人間関係や互いのよさを認め合う環境をつくる

①信頼関係

- 児童の発言や頑張り、よさを多面的に認める
- 児童同士で認めあえる場を設定する。
- 授業中の正答以外の発言や自分と異なる意見でも、そこから学ぶ姿勢を育てる。

②学年の発達段階に応じて、行事や授業の中で心を育てる教育に重点を置く。

- 教師側がめあてをもって、行事や授業を計画し、児童に目的意識をもたせ主体的に取り組ませる。そして、達成感や成就感を味わわせ、自信をつけさせる。合わせて、自己肯定感ももたせたい。

(2) 道徳・特別活動を通して規範意識や集団の在り方等についての学習を深める

①道徳教育の充実

- 規範意識・友情・思いやり・寛容・誠実・公正公平・親切・勇気などいじめの未然防止に関連した様々な道徳的価値について児童がじっくりと考えが深められる時間をもつ。
- 自己を振り返り、生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育んでいく。

②温かい雰囲気づくりの充実

- 児童が学校で過ごす、すべての場面において、互いのよさを認めあえる学級・学校の雰囲気づくりに努める。

(3) 子どもがいじめ問題を自分のこととして考え、自ら活動できる集団をつくる

①学級活動

- いじめの未然防止や解決の方法などについて話し合い、学級全体による集団決定や一人ひとりの自己決定を経て、いじめ防止へ向けた具体的な取組を実施する。ソーシャルスキルトレーニング、グループエンカウンター、グループワークトレーニングなど体験を通して人間関係を学ばせる。
- 話し合いの司会や進行を児童に経験させ、いじめにつながるような学級の諸問題を自分たちで解決していこうとする自発的・自治的な能力を育てる。
- 授業でふり返りのよさを紹介したり、帰りの会で友だちをほめたりする活動の実践を続けていく。
- 席替えやグループのメンバーを変える回数を増やし、誰とでも関わりを持てる環境をつくる。
- クラス全員で行う活動やそれぞれに責任をもたせる活動<係活動など>を行う。

②児童会活動

- ぐんま子ども「いじめ防止宣言」を受け、学校全体として統一した取組をする。
- 団活動（異学年集団）による、自発的、自治的な活動を効果的に展開することを通してリーダーシップや団体行動を意識させ、役割分担の必要性に気づかせたり、異学年の他者ともよりよい人間関係を築かせたりする。

(4) 常に危機感をもち、いじめ問題への取組を定期的に点検して、改善充実を図る

①毎月の生活アンケートの実施

- 月末に生活アンケートをとり、児童の心情の変化や身近で起こっていることを知る。

②生活の振り返りカードの実施

- 自分の生活を振り返ることにより、気付かせ、意識を高めていく。

③「よい子のやくそく」チェック

- 毎学期「よい子のやくそく」を確認し、日頃の生活をふり返る。

(5) 学校生活での悩みの解消を図るために、スクールカウンセラー等を活用する

- 毎月の生活アンケートと日頃の様子を観察により、気になる児童へ対応し、SCや専門機関と連携を図る。

- (6) 教職員の言動でいじめを誘発・助長・黙認することがないように細心の注意を払う
- 児童の呼び方
 - 言葉使いの指導（場に応じた言葉使い）
 - 積極的に児童に話しかけたり、児童同士の行動や会話から、心配なことについてはその場ですぐに指導することを心掛ける。
 - 公正・公平な人間関係づくり
 - 休み時間の児童の動きやグループをつくるときの様子など、児童の人間関係を敏感に捉える。
- (7) 教職員研修の充実、いじめ相談体制の整備、相談窓口の周知徹底を行う
- (8) 地域や関係機関と定期的な情報交換を行い、日常的な連携を深める
- ①児童と教員
- 児童からの情報に耳を傾け、何か起きた場合は事実関係を確認し指導する。
- ②保護者と教員
- 保護者との信頼関係を築き、情報を得る。
- ③教員と教員
- 教職員同士の連携を図り、家庭環境や友人関係、生活の様子などの情報を共有し、組織的な指導支援ができるようにする。
- ④学校と学校
- 校種を超えて、児童の情報を交換したり交流活動を行ったりする。
- ⑤学校と地域
- 地域ボランティアやお年寄りとの交流を通して、日頃から交流を深めることでいざというときの対応や情報交換を深める。

IV 早期発見

< いじめを発見する手だて >

(1) 教師と児童との日常の交流をとおした発見

- 日常の様子に目を配り、チャンス相談を行う。（いじめ発見チェックリストの活用）

(2) 複数の教員、保護者の目による発見

- 多くの教職員が様々な教育活動を通して児童生徒にかかわることにより、発見の機会を多くし、気になることは日常的に情報交換をする。
- 相談員・SC、保護者との連携

(3) アンケート調査

- 悩み事を含めた「いじめに関するアンケート調査」を月に1度実施。

※いじめかどうかの判断は、生徒指導部会で行う。いじめと判断した場合は、いじめ防止基本方針に沿って対応する。

V いじめに対する措置

1 事実の究明

聴取は、被害者→周囲にいる者(冷静に状況をとらえている者)→加害者の順に行う。
(状況によっては、聴取の順序を変更して行う。)

<事情聴取の際の留意事項>

- いじめられている子どもや、周囲の子どもからの事情聴取は、人目につかないような場所、時間帯に配慮して行う。
- 安心して話せるよう、その子どもが話しやすい人や場所などに配慮する。
- 関係者からの情報に食い違いがないか、複数の教員で確認しながら聴取をすすめる。
- 聴取を終えた後は、教師が保護者に説明する。

2 いじめの被害者、加害者、周囲の児童生徒への指導

(1) 被害者(いじめられた子ども)への対応

【基本的な姿勢】

- いじめられた子どもの味方になる。

(2) 加害者(いじめた子ども)への対応

【基本的な姿勢・指導】

- いじめを行った背景を理解しつつ、行った行為に対しては毅然と指導する。
- いじめは決して許されないことをわからせ、責任転嫁等を許さない。
- 被害者の辛さに気付かせ、自分が加害者であることの自覚をもたせる。
- 自分はどうすべきだったのか、これからどうしていくのかを内省させる。

(3) 観衆、傍観者への対応

【基本的な指導】

- いじめは学級や学年等集団全体の問題として対応していく。
- いじめの問題に、教師が児童とともに本気で取り組んでいる姿勢を示す。
- いじめの事実を告げることは「チクリ」などというものではないこと、辛い立場にある人を救うことであり、人権と命を守る立派な行為であることを伝える。
- 周囲ではやし立てていた者や傍観していた者も、問題の関係者として事実を受け止めさせる。
- 被害者は、観衆や傍観者の態度をどのように感じていたかを考えさせる。
- これからどのように行動したらよいのかを考えさせる。
- いじめの発生の誘引となった集団の行動規範や言葉遣いなどについて振り返らせる。
- いじめを許さない集団づくりに向けた話し合いを深める。

3 保護者との連携

(1) いじめられている子どもの保護者との連携

- 事実が明らかになった時点で、速やかに家庭訪問を行い学校で把握した事実を伝える。
- 学校として子どもを守り、支援していくことを伝え、対応の方針を示す。
- 対応経過を伝えるとともに、保護者からの子どもの様子等について情報提供を受ける。
- いじめの全貌がわかるまで、相手の保護者への連絡を避けることを依頼する。

(2) いじめている子どもの保護者との連携

- 事情聴取後、家庭を訪問し、事実を経過とともに伝え、その場で子どもに事実の確認をする。
- 相手の子どもの状況も伝え、いじめの深刻さを認識してもらう。
- 指導の経過と子どもの変容の様子等を伝え、指導に対する理解を求める。
- 誰もが、いじめる側にも、いじめられる側にもなりうることを伝え、学校には事実について指導し、よりよく成長させたいと考えていることを伝える。
- 事実を認めなかったり、うちの子どもは首謀者ではないなどとして、学校の対応を批判したりする保護者に対しては、あらためて事実確認と学校の指導方針、教師の子どもを思う信念を示し、理解を求める。

4 「謝罪の会」の開催。

<謝罪の会>

- 「謝罪の会」を行うことを原則とするが、被害者の保護者が希望しない場合は開催しない。
- 双方の保護者と児童、関係教員が一同会して「謝罪の会」を行う。
(教育的配慮から、児童を同席させない場合もある。)
- 学校側から事実確認をする。
- 被害者の保護者が直接悲しみや怒りを伝える。
- 加害者の保護者による謝罪

5 関係機関との連携

<連携を必要とする状況関係機関>

- いじめの発見状況を報告する。—————> 市町村教育委員会
- 対応方針について相談したい。—————> 県教育委員会・教育事務所
- 指導方針や解決方法について相談したい。—————> いじめ対策室
- いじめによる暴行・傷害事件、恐喝等の刑事事件が発生している。=> 児童相談所、警察
- いじめられた子どもが外傷や心的外傷を負っている。—————> S C、医療機関
- いじめられた子ども、いじめた子どもの心のケアが必要である。——> S C、児童相談所

VI 重大事態への対応

1 重大事態とは

(1) いじめにより被害児童の生命、心身又は財産に重大な被害が生じた事案

児童が自殺を企図した場合、身体に重大な傷害を負った場合、金品等に重大な被害（金銭の強要や器物損壊など）を負った場合、重大な精神性の疾患を発症した場合。

(2) いじめにより児童が相当の期間学校を欠席した事案

相当の期間については、年間30日を目安とします。ただし、児童が一定期間（7日以上）連続して欠席しているような場合。

(3) その他のいじめ事案

いじめの被害児童の保護者が、重大な精神性の疾患を発症した場合。

2 重大事態が発生した場合の対応

(1) 状況の把握

①教育委員会を通して町長へ発生報告

<報告内容>

- ・被害児童の氏名・学年・性別
- ・欠席期間・その他児童の状況
- ・児童・保護者から重大事態である旨の訴えがある場合は、その訴えの内容

②いじめ対策委員会を設置し、質問票を活用するなどして事実関係を調べる。

※調査については、教育委員会が調査主体を判断する。

<調査内容（1ヶ月をめどに）>

- ・該当学年の教員が中心となって調べる。（第三者も考える）
- ・要因、時期、行為者、態様、背景事情、人間関係等
- ・対応経過を時系列で記録
- ・教頭、生徒指導主任が整理する。

<聴取結果等のとりまとめ・報告事項>

- 1 当該児童（学校名）（学年・学級・性別）（氏名）
- 2 欠席期間・当該児童の状況
- 3 調査の概要（調査期間）（調査組織）（外部専門家が参加した場合は、その属性）
- 4 聴取内容（当該児童・保護者）（教職員）（関係する児童・保護者）（その他）
- 5 今後の当該児童への支援方策

③ 当該児童・保護者への説明、町長への報告

(2) 当面の対応

ア) 現場での応急処置	イ) 居合わせた子どもへの対応
ウ) 外部からの問い合わせへの対応	エ) 警察との連携
オ) 報道への対応	

この場合の心構え・初期目標

「子どもを守る」

「遺族の気持ちにより添う（サポート）」

「第二の犠牲者を出さない」

「学校の日常活動の回復」

○危機時の役割分担

- ・校内の指示・総括・・・校長、教頭（校長・教頭が対外的な対応におられるときは、教務）
- ・遺族担当・・・校長
- ・保護者担当・・・教務主任（PTA書記）
- ・報道担当・・・校長・教頭
- ・情報担当・・・記録：担任 生徒指導主任 報告文書：教頭
- ・ケア担当・・・養護教諭 教育相談主任
- ・庶務担当・・・事務主任

※職員会議といじめ対策委員会と合わせて共有の場を設ける。

①遺族への対応

心からの弔意を示すと共に、遺族の意向を丁寧に確認しながらすすめる。

○遺族へのコンタクトを急ぐ。（校長 学年主任 担任）

○通夜や葬儀については、遺族の意向を確認し、どう対応するか定める。

○事実を子どもや保護者、マスコミに伝えるにあたっては、遺族から了解とる。特に文書の場合は、遺族に文案を見せて了解を得る。

例) 「家族からは、〇〇と聞いています。」という表現にとどめる必要がある。

○兄弟姉妹へのサポートを行う。

②情報収集・発信

○憶測に基づくうわさ話が広がらないように正確で一貫した情報発信を心がける。

○プライバシーへの配慮が必要

○断片的な情報が公表されると、そのみがか原因であるかのような誤解を招きかねないので、慎重な対応をする。

○情報発信では、ア) 外部に出せるものは何なのかを明確にし、保護者、子ども、マスコミへの説明がちぐはぐにならないようにする。

イ) 「発生事実の概要」「対応経過」「今後の予定」に整理する。

ウ) 「文書で示せる内容」「口頭でのみ伝える内容」「質問があつてから説明する内容」に分けておく。

エ) 自殺の事実を公表するにあたっては遺族からの了解を得る。

③保護者への対応（保護者への情報提供・保護者会）

- 保護者向け文書の発行
 - ・事実
 - ・学校の対応
 - ・今後の予定
 - ・保護者の子どもへの接し方（ＳＣとの連携）
- 保護者会（全校か当該学年か）を開くつもりでいる。
 - ※事実の説明については、あらかじめ遺族に確認をとる。
- 心のケアについて、ＳＣによる講話をお願いします。
- ＰＴＡ役員の方に保護者代表としての立場から言うべきことは言ってもらい、その上で協力してもらうようにお願いします。

④マスコミへの対応

【基本的な視点】

- 取材申し込み等の外部との窓口は、一本化（校長・教頭）する。
 - ※電話での取材は、内容等の誤解を招くので、応じない方向で進める。
 - ※取材場所、取材時間を取り決める。（教育活動に支障がない範囲で）
- 記者会見を設定し、個々の報道各社の取材に応じないようにする。
- 取材場所は、校長室等を使用し、校内での自由な取材は、許可しない。

【取材を始める前の確認】

- 報道機関名 担当記者名を確認する。
- 取材に応じる時間を確認する。
- 報道陣の入る場所を限定する。
- 児童の人権や教育上の配慮自校等の約束をする。

- ア) 児童や関係者の実名を公表しない。
- イ) 児童等の顔写真の掲載や発表はしない。
- ウ) 児童や教師への直接インタビューは、校内では原則としてしない。
(どうしてもというときは、担任や校長・教頭の付き添いのもとで行う)
- エ) 授業中の教室への出入りはしない。
(児童に動揺を与え、授業に支障が出る。 児童の顔が写り、人権上問題がある。)
- オ) 構内を撮影するときは、撮影してもよい時間、場所を指示し、必ず教師が案内する

【取材中の対応】

- 憶測や推測で答えない。
- 事実のみ必要な部分について答える。
 - ※曖昧なことは、「確認中」「まだ確認していない」と答える。
- 質問以外の余分なことに触れないようにする。
- 児童の人権を守ることを第一と考える。
- 時間を守り、長引かないようにする。

(3) 学校再開の準備

①子どもに事実を伝える準備

○教師によって伝える内容が大きく変わらないように基本形をつくる。その上でクラスに即した伝え方を用意する。

- ・原因は、色々な要因が絡み合っているものであり、単純化しない。
- ・自殺の手段を詳細に伝えない。
- ・自殺を美化しない。
- ・自殺をした人を非難しない。

○全校集会は、死亡の事実を伝えるにとどめ、短く終えて、自殺については、各クラスから伝える。

※放送を使うか、当該クラスに校長が出向いて話をする方法もある。

②子どものケア

○自殺した子どもと関係の深い人や自殺の危険の高い人、現場を目撃した人をリストアップし、専門家のケアが受けられる態勢を用意する。

＜各学年の「心を育てる」年間活動＞

「心を育てる」活動計画

1年

月	行事内容	ねらい
4	1年生を迎える会	活動を通して、みんなで なかよく 生活していこうという気持ちを育てる。
6	アサガオの栽培	水やりや支柱立て等の世話をする活動に進んで取り組むことを通して、その変化や成長の様子に気付くとともに、植物に親しみをもち、大切にすることができるようにする。
9	運動会	くじけない心 を持ちながら自分の目標に向かう気持ちを育てる。仲間と 協力 することの喜びや大切さを感じられるようにする。
11	持久走大会	自分の目標に向かいコツコツと努力をすることの大切さや、友達の頑張りを認めようとする心を育てる。
3	6年生を送る会	上級生への感謝の気持ちを表現できるようにする。

「心を育てる」活動計画

2年

月	行事内容	ねらい
4	1年生を迎える会	活動を通して、みんなで なかよく 生活していこうという気持ちを育てる。
5	ミニトマトの栽培	水やりや支柱立て等の世話をする活動に進んで取り組むことを通して、その変化や成長の様子に気付くとともに、植物に親しみをもち、大切にすることができるようにする。
9	運動会	くじけない心 を持ちながら自分の目標に向かう気持ちを育てる。仲間と 協力 することの喜びや大切さを感じられるようにする。
11	持久走大会	自分の目標に向かいコツコツと努力をすることの大切さや、友達の頑張りを認めようとする心を育てる。
3	6年生を送る会	一人一人が大切な役割ということを意識し、 協調性 を持ちながら上級生への 感謝 の気持ちを表現できるようにする。

「心を育てる」活動計画

3年

月	行事内容	ねらい
4	1年生を迎える会	活動を通して、みんなで なかよく 生活していこうという気持ちを育てる。
9	運動会	長柄小の一員として、自分の役割を果たし、上下学年の児童とも協力して運動会を成功させようとする気持ちを育てる。
11	持久走大会	自分の目標に向かいコツコツと努力をすることの大切さや、友達の頑張りを認めようとする心を育てる。
3	6年生を送る会	6年生への感謝の気持ちや、1年間の自分の成長を振り返る機会とする。(歌や演技、呼びかけを通して、自己表現をする喜びや協調性を学ばせたい。)

「心を育てる」活動計画

4年

月	行事内容	ねらい
4	1年生を迎える会	活動を通して上級生としての 自覚 を持ち、みんなで なかよく 生活していこうという気持ちを育てる。
9	運動会	長柄小の一員として、自分の役割を果たし、上下学年の児童とも協力して運動会を成功させようとする気持ちを育てる。
11	持久走大会	自分の目標に向かいコツコツと努力をすることの大切さに気づき、友達の頑張りを認めようとする心を育てる。
2	二分の一人式	生まれてから今までの10年間で、周りの人に支えられてきたことに気づき、感謝の気持ちを育てる。 未来に向かって自分の夢を持ち、実現するための努力を自覚できるようにする。
3	6年生を送る会	6年生に対する今までの感謝の気持ちを表す。5年生の働きを見て、来年は自分たちがやるんだという意識と5年生に対する感謝の気持ちを育てる。

「心を育てる」活動計画

5年

月	行事内容	ねらい
4	1年生を迎える会	活動を通して上級生としての 自覚 を持ち、みんなで なかよく 生活していこうという気持ちを育てる。
9	運動会	運動会準備や団活動を通して、学校のため、人のために行動することの大切さを学ぶ。
10	林間学校	協力して宿泊学習をすることにより、友達の大切さ、計画的に行動する事の大切さを学ぶ。
11	持久走大会	自分で目標を立て、その目標に対して継続的に努力し、目標を達成することの大切さを学ぶ。
3	6年生を送る会	6年生を送る会の実行委員を通して、行事を企画・運営する力を身に付ける。また、4月から最高学年であることを自覚させる。

「心を育てる」活動計画

6年

月	行事内容	ねらい
4	1年生を迎える会	・最上級生になった 自覚 を持ち、1年生に 親切な気持ち で接しようとする気持ちを養う。
5	結団式 プール清掃	・団をまとめる、先頭に立つ意義を自分で考え、自分たちに与えられた役割を自覚し、自分たちの理想を目標に掲げながら、やっていくことを誓う。 ・夏に向けて授業で使うプールをきれいにすることで6年生としての役割の大変さを知り勤労の大切さを学ぶ。
9	運動会	・団活動の運営、応援合戦の運営、運動会の準備や後片付け、そして競技に対する姿勢などいろいろな角度から最上級生としての役割の必要性を学ぶ
11	持久走大会 修学旅行	・最後まであきらめずに走りきる気持ちと体力を養う。 ・グループ活動の協力姿勢と公共のマナーを守りながら楽しく活動する力を養う。
3	6年生を送る会 ボランティア清掃 卒業式	・下級生やお世話になった方に感謝の気持ちを伝える。 ・6年間お世話になった教室など学校全体を気持ちを込めてきれいにすることで、感謝の気持ちを表す。 ・小学校生活最後の授業にふさわしい姿勢と態度で臨み、中学生へ向けての心構えをする。